

## 生活科におけるコミュニケーションと外国語活動

中島 眞吾\* 三島 浩路\*\*

## Communication in Living Environment Studies and Foreign Language Activities

NAKASHIMA Shingo MISHIMA Koji

## 要 約

2020年度から新学習指導要領が施行され、中学年で外国語活動、高学年で外国語科がそれぞれ新たに始まる。現行の学習指導要領では、外国語活動は高学年で行われているが、新学習指導要領では外国語活動は中学年に引き下げられる。外国語活動では、コミュニケーションを図る素地となる資質・能力を育成することを目標としているが、中学年で外国語を学ぶためには、その素地のための土台が必要である。

本稿では、その土台となるのは、低学年で行われる生活科であると位置付け、コミュニケーションというキーワードをもとに、初等教育における生活科と外国語活動のつながりについて論じた。

キーワード：小学校学習指導要領、生活科、外国語活動、コミュニケーション

## 1. はじめに

本稿では、「生活科」と「外国語活動」が別個に存在するのではなく、「生活科」が幼児教育と小学校教育への移行を円滑にする橋渡しする架橋的教科としての役割を果たすように、「生活科」がどのように「外国語活動」や「外国語科」の橋渡しをするのかについて検討し、論じていきたい。

小学校に入学したばかりの子どもの中には、幼児教育から小学校教育への変化に対応できず、小1プロブレムを引き起こすことがある。こうした実態を考慮し、幼稚園や保育所での遊びを中心として総合的に学ぶ幼児教育の成果を小学校教育に生かす入学当初の「スタートカリキュラム」が編成される<sup>1)</sup>。

「スタートカリキュラム」とは、前述の小1プロブレムなど、学校生活への適応が困難な子どもの実

態が指摘されている中、この課題への対応として構成するカリキュラムのことであり、児童が義務教育の始まりにスムーズに適応していけるようにすることがねらいである。その背景には、2008年に改訂された学習指導要領の生活科改訂の趣旨にある「改善の具体的事項」の記述にある。以下のように記されている。

幼児教育から小学校教育への円滑な接続を図る観点から、入学当初をはじめとして、生活科が中心的な役割を担いつつ、他教科等の内容を合わせて生活科を核とした単元を構成したり、他教科等においても、生活科と関連する内容を取り扱ったりする合科的・関連的な指導の一層の充実を図る。また、児童が自らの成長を実感できるよう低学年の児童が幼児と一緒に学習活動を行うなどに配慮するとともに、教師の相互交流を通じて、指導内容や指導方法について理解を深めることも重要である<sup>2)</sup>。

\* 人間力創成総合教育センター

\*\* 中部大学現代教育学部現代教育学科

上述の視点から、第1学年入学当初にスタートカリキュラムを編成することが効果的だと考えられている。これにより、子どもはゆったりとした時間の中で、自らの思いや願いを実現する活動に取り組むことができるとともに、幼児教育の成果を受け継ぎながら小学校教育に接続することが可能となる。特に入学当初の子どもは、未分化な認識の状態にあることから、体験を通して総合的に学ぶという発達の特質を踏まえることが重要であり、そうした視点に立って教育活動を進めるとき、生活科が担う役割は大きい。以上のように就学前教育と小学校教育のそれぞれの特徴をすり合わせ、なめらかな接続を図るのがスタートカリキュラムの役割である<sup>3)</sup>。

また、幼児教育と小学校教育の学びとの接続という点について以下のような指摘もある。

---

生活科はそもそも設置当初から、幼児教育との円滑な接続を図ることを大切にしてきた。幼児教育での学びが接続するよう、生活科を中心に複数の教科を組み合わせた合科的な指導や他教科等との関連的な指導を行うことは、子どもにとっても段差の少ない自然な学び方だといえる。このように生活科は、幼児教育から小学校教育への移行を円滑に橋渡しする架橋的教科としての役割も担っている<sup>4)</sup>。

---

幼児教育と小学校教育との円滑な接続が「生活科」によって可能になるだけでなく、小学3年生からはじまる「外国語活動」の円滑な実施においても、「生活科」は重要な役割を果たすことが期待される。そこで、「外国語活動」、さらには小学5・6年生の「外国語科」と、「生活科」との関連について考える。

## 2. 「外国語活動」と「外国語科」

2017年3月に新たな小学校学習指導要領（以下、新学習指導要領）が告示され、中学年（3・4年）に「外国語活動」が導入されることになった。また、高学年（5・6年）に「外国語科」が新設されることになった。2011年度から高学年で実施されている「外国語活動」と同じく、中学年で導入される「外国語活動」では、教科ではない学習領域という枠組みの中で、高学年で学ぶ教科としての「外国語科」に備

えて外国語に慣れ親しむという形になる。

「外国語活動」と「外国語科」の主な違いは、「外国語活動」が「聞くこと」と「話すこと」を扱い、「外国語科」では、それに加え、「読むこと」「書くこと」も扱う点にある。また、「外国語活動」では、外国語の知識及び技能の定着を目標にしておらず、外国語に慣れ親しみ、外国語でコミュニケーションを図る素地を養うことに力点を置いている。それに対して、「外国語科」は教科であることから、評価も行われ、また、実際のコミュニケーションにおいて活用できる基礎的な技能を身に付けることを目標にしている。

2011年度より、高学年において「外国語活動」が導入され、小・中・高等学校で一貫した外国語教育を実施することにより、外国語を通じて、言語や文化に対する理解を深め、積極的に外国語を使ってコミュニケーションを図ろうとする態度や、情報や考えなどを的確に理解したり適切に伝えたりする力を身に付けさせることを目標として掲げ、「聞くこと」、「話すこと」、「読むこと」、「書くこと」などを総合的にねらいとして、様々な取り組みがなされてきた。そして、その充実により、児童の高い学習意欲、中学生の外国語教育に対する積極性の向上といった成果が認められている。一方で、①音声中心で学んだことが、中学校の段階で音声から文字への学習に円滑に接続されていない、②日本語と英語の音声の違いや英語の音声と綴りの関係、文構造の学習において課題がある、③高学年は、児童の抽象的な思考力が高まる段階であり、より体系的な学習が求められることなどが課題として指摘されている<sup>5)</sup>。

## 3. 小学校学習指導要領にみる「生活科」と「外国語活動」

「生活科」と「外国語活動」のつながりを考えるにあたって、まずは、それぞれ学習指導要領で掲げられている目標と内容を概観する。

---

### 生活科 目標<sup>6)</sup>

具体的な活動や体験を通して、身近な生活に関わる見方・考え方を生かし、自立し生活を豊かにしていくための資質・能力を次のとおり育成することを目指す。

- (1) 活動や体験の過程において、自分自身、身近な人々、社会及び自然の特徴やよさ、それらの関わり等に気付くとともに、生活上必要な習慣や技能を身に付けるようにする。
- (2) 身近な人々、社会及び自然を自分との関わりで捉え、自分自身や自分の生活について考え、表現することができるようにする。
- (3) 身近な人々、社会及び自然に働きかけ、意欲や自信をもって学んだり生活を豊かにしたりしようとする態度を養う。

「生活科」では、具体的な活動や体験を通して、自立し、生活を豊かにしていくための資質・能力を育成することを主な目標としている。そして、(1)にあるように、あくまで、活動や体験の過程の中で、自分自身、身近な人々、社会や自然の特徴やよさ、それらの関わり等に気付くこと、(2)では、身近な人々、社会、自然を自分との関わりで捉え、表現することができるようにすることを目指す。そして、(3)では、児童が自ら身近な人々、社会及び自然に働きかけるということ、そして、意欲や自信をもって学び生活を豊かにしようとする態度を養うことを目指す。

#### 外国語活動 目標<sup>7)</sup>

外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせ、外国語による聞くこと、話すことの言語活動を通して、コミュニケーションを図る素地となる資質・能力を次のとおり育成することを目指す。

- (1) 外国語を通して、言語や文化について体験的に理解を深め、日本語と外国語との音声の違い等に気付くとともに、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しむようにする。
- (2) 身近で簡単な事項について、外国語で聞いたり話したりして自分の考えや気持ちなどを伝え合う力の素地を養う。
- (3) 外国語を通して、言語やその背景にある文化に対する理解を深め、相手に配慮しながら、主体的に外国語を用いてコミュニケーションを図ろうとする態度を養う。

「外国語活動」の目標を見ると、「コミュニケーションを図る素地となる資質・能力を育成する」ことを中心に置いているのがわかる。(1)では、言語や文化について体験的に理解を深めるということと、日本語と外国語との音声の違い等に気付くとともに、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しむことを目標としている。また、(2)では、身近で簡単な事項について、自分の考えや気持ちなどを伝え合う素地を養うとあり、(3)では、主体的に外国語を用いてコミュニケーションを図ろうとする態度を養うとある。

「生活科」と「外国語活動」の目標で下線を施した部分に注目してみると、「生活科」と「外国語科」が共有する指向性を読み解くことができる。

生活科の「具体的な活動や体験を通して、自分自身のこと、自分の身の回りの人やことに気付き、その気付いたことを身近な人に伝える」こそが、まさに「コミュニケーション」のことであり、「生活科」と「外国語活動」の二つが根底で共有している目標は、言い換えれば、「コミュニケーションを図ろうとする態度を養うこと」と言える。

次に、内容について考えてみたい。「生活科」の内容については、以下のように他教科や他学年との関連と接続の役割が求められる。

- (4) 他教科等との関連を積極的に図り、指導の効果を高め、低学年における教育全体の充実を図り、中学年以降の教育へ円滑に接続できるようにするとともに、幼稚園教育要領に示す幼児期の終わりまでに育ってほしい姿との関連を考慮すること。特に小学校入学当初においては、幼児期における遊びを通した総合的な学びから他教科等における学習に円滑に移行し、主体的に自己を発揮しながら、より自覚的な学びに向かうことが可能となるようにすること。その際、生活科を中心とした総合的・関連的な指導や、弾力的な時間割の設定を行うなど工夫をすること<sup>8)</sup>。

上記の「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」とは、幼児期の遊びや生活を通じて育まれる自立心や協同性、思考力の芽生えた姿である。「生活科」を中心としたカリキュラムによる教育で幼児期に芽

生えた自立心や協同性などを育むことで、小学校へ入学した児童が、安心して学校生活を送るとともに、中学年以降の学習を確かなものにしていくことが期待される。「幼児期における遊びを通した総合的な学び」や、「他教科等における学習に円滑に移行」、「生活科を中心とした合科的・関連的な指導」といったキーワードから、「生活科」が教科等間の横のつながりと幼児期からの発達に段階に応じた縦のつながりとの帰結点である<sup>9)</sup>ということがわかる。「生活科」の授業で行う学校探検は、社会科・理科などの教科学習へと発展させる指向性と、協同性を育むなどといったコミュニケーション力を高める指向性とを合わせもっている。この点から見ると、スタートカリキュラムでは学校探検などがあるが、身近な場所を探検することで新たに何かに気づき、それらを他の人に伝えるというコミュニケーションが、「生活科」での特徴的な活動であると言える。

次に、「外国語活動」の内容について概観する。具体的な言語の働きの事項として、以下のような記述がある。

## ②言語の働きに関する事項<sup>10)</sup>

言語活動を行うに当たり、主として次に示すような言語の使用場面や言語の働きを取り上げるようにする。

ア 言語の使用場面の例

(ア) 児童の身近な暮らしに関わる場面

- ・家庭での生活
- ・学校での学習や活動
- ・地域の行事
- ・子供の遊び
- など

(イ) 特有の表現がよく使われる場面

- ・挨拶
- ・自己紹介
- ・買物
- ・食事
- ・道案内
- など

(ア) の「児童の身近な暮らしに関わる場面」はまさに「生活科」で扱う場面設定のことであり、既

に「生活科」で学習したことを復習したり、応用したりすることができる。

内容の取扱いについては、以下の記述にあるように、児童が外国語でコミュニケーションを図るための具体的な課題や場面を設定する必要がある。

## 指導計画の作成と内容の取扱い<sup>11)</sup>

ア 単元など内容や時間のまとまりを見通して、その中で育む資質・能力の育成に向けて、児童の主体的・対話的で深い学びの実現を図るようにすること。その際、具体的な課題等を設定し、児童が外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせながら、コミュニケーションの目的や場面、状況などを意識して活動を行い、英語の音声や語彙、表現などの知識を、三つの領域における実際のコミュニケーションにおいて活用する学習の充実を図ること。

以上見てきたように、新学習指導要領で「外国語活動」で目標とする「コミュニケーションを図る素地を養う」ためには、コミュニケーションを図るための適切な場面や課題を設定することが大切である。そのため、教科等間の横のつながりと、幼児期からの発達に応じた縦のつながりとの交点である「生活科」との連続性を考慮した授業のデザインが有効である。

## 4. 「生活科」におけるコミュニケーション

「生活科」では、学校、家庭、自然とのかかわりが大切になるが、その身近な事象との「かかわりの場」をデザインすることが教師には求められている。「かかわる」とは、見る、聞く、さわるといった直接体験を基盤としつつ、より長期的には、作る、育てる、遊ぶ、伝え合うといった対象との物理的、心理的、社会的な触れ合いを繰り返し行っていくプロセスを経て学びの質が高まっていくような活動群のことを意味している。生活科の場合、教室はもちろんのこと、学校内外の多種多様な場所が、教育的な意図のもとに「かかわりの場」として成立しうる。「かかわりの場」をデザインする上でのキーワードは「コミュニケーション」であろう。ここでいう「コ

コミュニケーション」とは二つの意味がある<sup>12)</sup>。

一つは「活動としてのコミュニケーション」である。コミュニケーションは他者とのかかわりの基盤となる活動である。言語活動だけでなく、非言語的な活動（表情、動作など）をも含めた意味の伝え合いに基づいた体験の積み重ねによって、かかわりが深められていくのである。

もう一つは、「体験を具象化するようなコミュニケーション」である。例えば、「見て驚いた」、「触って感じた」というような一つ一つの体験について子どもたちがともに振り返り、その意味について語り合ったり、複数の方法で表現しあったりすることで、自分たちの体験が意味づけられていく。「活動・体験の経験化」はこのような丁寧なプロセスの積み重ねによって実現するのである<sup>13)</sup>。

特に上記の二つめのコミュニケーションは、「生活科」が大切にしている、対象と直接かかわる中で感じたり考えたりしたことを表現していく学習過程の中核である。「生活科」では、児童自ら対象に積極的に働きかけ、体験活動と表現活動の繰り返しの中で学びの質が高まっていき、コミュニケーションを図る楽しさや喜びを感じる機会を得ることができ、その経験が中学年での学びにつながっていくのである。

## 5. 「外国語活動」におけるコミュニケーション

上記のようなかたちで「生活科」で育んだコミュニケーションを図る土台は、次段階である中学年の「外国語活動」につながっていく。次に、「外国語活動」におけるコミュニケーションについて考えてみたい。「外国語活動」の目標は「外国語を用いて、コミュニケーションを図る素地となる資質・能力を育成する」ことである。小学校中学年の「外国語活動」から中学校、高等学校の外国語活動へと続く一連の学習活動について学習指導要領に示された目標を通時的に見ると、「コミュニケーション能力の育成」「言語や文化についての理解の深化」「積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成」など一貫した理念のもと、構造的なつながりをもっていることがわかる<sup>14)</sup>。学習指導要領の「コミュニケーション能力」とは、外国語でコミュニケーションを図る

能力のことであり、「話す」「聞く」「読む」「書く」の四技能の力と捉えてよいであろう。「コミュニケーション能力」についてCanaleは次のように説明している<sup>15)</sup>。

---

現実的な場面において、メッセージを適切に伝えたり受けたりするコミュニケーション能力は、以下の四つの構成要素からなり、これらの能力が学習の初期段階からバランスよく育成されることにより、コミュニケーション能力が身に付いていくものである。

### (1) 文法能力 (Grammatical Competence)

語彙、発音、綴りなどの言語体系についての知識とそれらの知識を実際に使いこなせる能力のことである。

### (2) 社会言語学的能力 (Sociolinguistic Competence)

言語が使用されている社会的背景や状況、相手との関係、目的等に配慮し、適切に言語を使用できる能力である。

### (3) 談話能力 (Discourse Competence)

文章を読む、発話を聞くなどして、その全体の文脈から、書き手や話し手が何を伝えたいのかを理解したり、状況や主題に合った、まとまりのある文章を書いたり発話したりできる能力である。

### (4) 方略的能力 (Strategic Competence)

コミュニケーションをより円滑に間断なく行うためのコミュニケーション・ストラテジーを使いこなす能力である。適切な言語表現が思い浮かばなかったりした時、別の遠回しの表現を使ったり、相手に聞き返したり、ジェスチャーを使うなどして、なんとかコミュニケーションを継続させようとする能力をさす。

---

上記のCanaleの「コミュニケーション能力」の定義では、始めの部分で「現実的な場面において」とある。コミュニケーション能力を育成するためには、「外国語活動」の授業の中で、「生活科」で学んだような現実的な場面に目を向け、できる限り現実的な場面とのかかわりの中で外国語に触れていきながら、(1) から (4) それぞれのコミュニケーション能力を有機的に高めていくことが大切なのである。そのためには、授業の中にどれだけ現実的な場

面を取り入れることができるかが重要になる。

## 6. おわりに

外国語を学ぶ際、具体的な活動や体験、また言語や文化に対する「気付き」を生み出さない機械的な繰り返し活動ばかりの授業では、「積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成」や「コミュニケーション能力の育成」という本来のねらいは達成されない。「外国語活動」から始まる「外国語の学び」は、教え込みではなく、本稿で述べてきたように、「生活科」での学びの方法を通して、子どもたちが考えたり調べたりすることが重要である。子どもたち一人ひとりの気付きをもとに、コミュニケーションを図ろうとする主体的な態度を養うことから始める。その後、コミュニケーション能力を継続的に高めていくことが求められる。その意味で、筆者は、外国語でのコミュニケーション能力を高めていくスタートは、「外国語活動」ではなく、「生活科」であると捉え、授業をデザインしていくことは有効であると考え。今後は、そのような見地に立って、具体的な授業デザインについて実践的な研究を進めていきたい。

## 参考・引用文献

- 1) 原田信之・須本良夫・友田靖雄：気付きの質を高める

生活科指導法、東洋館出版社、2011. 38頁

- 2) 文部科学省：小学校学習指導要領解説—生活編、平成20年8月、日本文教出版、2008. 5頁
- 3) 原田信之・須本良夫・友田靖雄：気付きの質を高める生活科指導法、東洋館出版社、2011. 46-47頁
- 4) 同上、38頁
- 5) 文部科学省：小学校学習指導要領解説—外国語活動・外国語編、平成29年7月、開隆堂出版、2017. 7頁
- 6) 文部科学省：小学校学習指導要領解説—生活編、平成29年7月、日本文教出版、2018. 114頁
- 7) 文部科学省：小学校学習指導要領解説—外国語活動・外国語編、平成29年7月、開隆堂出版、2017. 151頁
- 8) 文部科学省：小学校学習指導要領解説—生活編、平成29年7月、日本文教出版、2018. 57頁
- 9) 同上、58頁
- 10) 文部科学省：小学校学習指導要領解説—外国語活動・外国語編、平成29年7月、開隆堂出版、2017. 153頁
- 11) 同上、153頁
- 12) 鹿毛雅治・清水一豊：平成20年版 小学校新学習指導要領 ポイントと授業づくり 生活、東洋館出版社、2009. 6-8頁
- 13) 同上、8頁
- 14) 木村松雄：新しい時代の英語科教育法—小中高を一貫した理論と実践、学文社、2019. 4頁
- 15) Canale, M. (1983) From communicative competence to communicative language pedagogy. In J. C. Richards & R. W. Schmidt (Eds.), *Language and Communication*. London: Longman pp. 2-27

受付日 2019年9月30日

受理日 2019年11月19日